愛知県美術館における教育普及活動について
学校との連携を中心に―活動報告とその考え方

企画普及課主任学芸員　高橋秀治

はじめに

開館15周年を迎える愛知県美術館は、その収集活動（収蔵品）、展示活動（企画展）、保存活動などで、評価されており、それらの活動は実際の展示室をはじめ図録やホームページなどを通して、多くの人々の目に触れる機会を提供している。1992年の開館に際して施行された愛知芸術文化センター条例の文中では、美術館の業務を「美術品及び美術に関する資料を収集し、保管し及び展示すること」と「美術に関する調査研究を行なうこと」「展示室を利用させること（８階貸しギャラリーのことを指す）」の三点にまとめられている。美術館の重要な活動のひとつである教育普及活動については、かなり幅広く行なってきているが、「教育普及活動」という言葉は条例文中には表記されておらず、条例文を決める際にその意識がなかったのか、「展示すること」自体も教育普及活動であり、自明のこととして理解されていたのかは、はっきりしない。いずれにしても行なってきた教育普及活動をまとめたり、検証したりする機会は前述の活動に比べると多くはなかった。とくに教育普及活動の中でも近年全国の美術館がその取り組みに力を入れている鑑賞教育については、十分にまとめる機会を持ち得なかった。そこでこれまでの活動状況や成果を報告し、今後への課題や問題点、伸ばすべき方向などを検証していく場としたいと考えるものである。

教育普及活動の現状

これまで行ってきた教育普及活動を見直すことは、これからの美術館活動において目指す方向を考える上でひとつの視点を与えることにもなるのではないだろうか。全国的な美術館の動向をみても、ただ作品資料を並べただけで、「よいものを見せれば人々はわかってくれるので、それでよい」とか「よいものを見せれば観客を啓蒙できる」などとする古い意識が、通用しなくなって久しい。現在は「よいものを展示したうえで、わかりやすい説明が求められている」時代といえるだろう。

1992年に開館した愛知県美術館は都市の中央部に位置した美術館であり、劇場やコンサートホール、アートライブラリーなどと一緒に大きなビルに入った複合施設でもある。このことから、美術館部門としては、独自の講堂や講義室などを持たず、また、一般に催されている近隣の文化センターの実技講座などとの競合をさけるという論の下に、施設・設備的には実技講座を開くことを目的とした実習室も備えなかった。これまで行なってきた教育普及活動の中心は、積極的に「見る」あるいは「鑑賞」ということに重点を置いたものである。学芸員が行なうギャラリートーク、子供鑑賞会などの活動は年々増加傾向にあり、質の向上が課題でもある。一方観客の要求は多様で、実験的に行なったワークショップでは、多数の応募者を数えているのも事実であり、そのような要求をどう吸収していくかも課題であろう。

これまで愛知県美術館での教育普及活動を概観すると下記のような項目が挙げられる。

愛知県美術館の教育普及活動：

記念講演会（各企画展）／連続講座／ギャラリートーク（各企画展）／鑑賞ガイド配布／小・中・高の先生方との鑑賞学習交流会／友の会向けのプログラム（特別鑑賞会）／団体鑑賞への対応／ビデオテークの番組制作と提供／ワークシート配布／作品解説カード配布／視覚障害者の方へのプログラム（立体コピーなど）／子供鑑賞会（夏休みを中心に）／移動美術館（毎年県内一箇所）開催時の講演会とギャラリートーク／ワークショップ（実験的に数回）／出前講座（平成18年度より、県内遠隔地での講座）／博物館実習生向け講義および実

習

などである。

これらは、対象別の観点から大別すると、一般向け、児童生徒向け、教職員向け、友の会会員向け、視覚障害者向けなどに分けられる。

こうした種々の「見る」ことに重点を置いた活動の中でも現在力を入れているのが、学校関係への働きかけである。小・中学生は所蔵品展については平成14年度より導入された学校週五日制に対応して無料化されており、高校生についても学校行事としての観覧は無料となっている。

平成14（2002）年度からの新学習指導要領には、小学校の総合的な学習の時間の取扱いのなかに「学校図書館の活用、他の学校との連携、公民館、図書館、博物館等の社会教育施設や社会教育団体等の各種団体との連携、地域の教材や学習環境の積極的な活用などについて工夫すること」とあり、さらに各教科の図画工作科の項目中には、「各学年の『B鑑賞』の指導に当たっては、児童や学校の実態に応じて、地域の美術館などを利用すること」、中学校では「各学年の『B鑑賞』の題材については、日本や諸外国の児童生徒の作品、アジアの文化遺産についても取り上げるとともに、美術館・博物館等の施設や文化財などを積極的に活用するようにすること」という文言によって地域の美術館施設の利用が謳われるようになった。

このことにより学校側からのアプローチも以前に比べ多くなった。さらに企画展の観覧についても、2004年６月から小・中学生の観覧料無料化を展覧会の共催者との協議の上で図っていることにより小・中学生の個人、団体とも利用が年々増加している。小・中学校の来館団体数は2003年度は49校であったが、2005年度では73校となっており、以前はただ連れてくるだけであった教師側からの解説やガイダンスの要望も増加している。また場合によっては、美術館側からガイダンスなどを提案したりして、それに応えるべく小・中学生及び学校の教師に向けてのプログラムの内容の充実を図ってきているが、その中でも「小・中・高の先生方との鑑賞学習交流会」を通して美術館の活動を理解してもらうとともに、美術館を利用した鑑賞学習の手立ての研究を深めている。

「小・中・高の先生方との鑑賞学習交流会」

現在、企画展ごとに行なっている「小・中・高の先生方との鑑賞学習交流会」は必ずしも図工・美術の専科の先生のみを対象とはせず、鑑賞教育に興味関心を持っている教育関係者であれば広く受け入れている。この会はその名のように一方的に美術館からの説明に終らず、参加する先生同士の実践事例の発表などを通して情報交換を行なうとともに、交流会の参加者が刺激を受け、鑑賞教育に取り組もうとする動機付けになることを期待しているからでもある。

実際に他の教師の発表を聞いた参加者のアンケートを見ると、何かしら自分の実践につなげたいと言う気持ちで臨んでいることがわかる。（参考１のうち先生方との鑑賞学習交流会後の参加者のコメント参照）

一般に図工・美術の教師は各学校内では同教科を専門とする教師がいなくて、恒常的に相談したり、研究しあったりする場が少ないのが現状で、それぞれの地域での横の連携にゆだねられている。高校ではさらに一人の教師が複数の学校の美術を受け持つということさえ普通に行われるようになっており、そのためそれぞれの地域での研究会等を通してしか意見交換などが行なえないでいる。しかし、学校内での少数派である一方、小学校では特に図工の専門家として、それを専門としない多くの教師の手本になって新しい教授法を示す役割も課せられている。

特に学習指導要領に地域の美術館、博物館の利用が謳われるようになり、また、図工・美術科の中で鑑賞領域が重視されるようになると一層図工・美術教師への要求度（期待度）も高まっているといえるだろう。そのような状況の中で美術館が果たす役割とは、作品を展示するだけでこと足れりとするのではなく、観覧者の目線にたち、より観覧者（児童・生徒）に近づいていくことが求められており、その仲介役となる教師にさまざまな情報と材料を提供し、作品鑑

賞のリーダーとなれるように援助していくことが必要だと考えるものである。

そのような観点からも愛知県美術館では、美術館利用の促進を目的とすることに留まらず、日ごろ接する機会の多くない図工・美術担当の教師同士の情報交換、交流の場として設定したのが「小・中・高の先生方との鑑賞学習交流会」である。この会では互いの実践を発表しあったり、全国的な視点からの新しい動きなどの情報交換をすることによって、それぞれの鑑賞教育の取り組みを高めていこうとしているものである。

しかしながら、この鑑賞学習交流会の活動が目論みのように機能するようになったのは最近のことで、今日にいたるまでには、いろいろと試行錯誤の時期を経ている。

「小・中・高の先生方との鑑賞学習交流会」のあゆみ

◎教師を対象にした企画展説明会（平成９（1997）年度～平成13（2001）年度）

当初「教師を対象にした企画展説明会」としてスタートした。これは、学校の現状を十分理解せず、ただそれぞれの企画展を先生向けに宣伝すれば、児童・生徒を連れてきてもらえるのではないかという、今から思えば甘い考えから始めたもので、とにかく当日来た先生に向けて展覧会担当者が、展覧会の説明を一方的にして展覧会を見てもらうということに終始していた。当然のことながらそのため、学校の先生方にとっては各自が展覧会を見るひとつの機会以上のものになりにくかった。

◎小・中・高の先生方との鑑賞学習交流会（平成14（2002）年度～）

学校週五日制の導入という社会的な変化に対応するとともに、それまでの「教師を対象にした企画展説明会」の問題点を認識して、名称を「小・中・高の先生方との鑑賞学習交流会」と変更し、当該企画展の説明だけでなく、学校団体による美術館利用の手順の説明や、学校側からの要望を聞く機会と捉え、さらに、授業の一環として美術館を利用された先生方の実践発表などを行って、学校と美術館の連携の在り方について提案した。

「小・中・高の先生方との鑑賞学習交流会」の成果と問題点

一昨年までの「小・中・高の先生方との鑑賞学習交流会」では、美術館所蔵作品や企画展作品を題材とした図工・美術の授業実践報告を行った。実際の美術館を体験し、作品から得た感動を通して、鑑賞と表現の一体化を試みた実践や対話型の鑑賞の実践などの内容が報告され、回によっては50名を越える参加者を集めた。しかし、次のような問題点も認められた。

① 発表者による一方的な説明にとどまり、「意見交流」という目的を十分には果たしていない。

② 発表内容が単なる実践紹介に終始しており、「学校と美術館の連携のあり方」や「鑑賞学習のあり方」について十分掘り下げることができていない。

③ 発表者の先生が、小学校に限られている。

これらの問題点を解決しながら本来の目論みを達成するために、昨年度末から新たに「鑑賞学習ワーキンググループ」を組織した。これは、より鑑賞学習に関心の高い先生方（実際の募集には退職した元教師、関心を持っている講師や美術教育を専攻している学生など現職の正教員以外にも声をかけた）に集まってもらって、研究会を立ち上げ、そこでの意見交換や実践を経たものを従来からの「小・中・高の先生方との鑑賞学習交流会」で紹介したり、発表することによって他の先生方へ刺激を与えるとともに、出された意見をワーキンググループへフィードバックして研究を深めるようにしたものである。

「鑑賞学習ワーキンググループ」

このワーキンググループの発案は、それまで「小・中・高の先生方との鑑賞学習交流会」へ参加しながら、物足りなさを感じていた一部の先生からの研究会設置の提案があったことと、美術館側の担当者にも「小・中・高の先生方との鑑賞学習交流会」が形骸化しつつあるように

感じていた時期とが重なり、なにか実践的な行動を起こすことによって交流会を活性化し、本来の姿を取り戻せるのではないかという問題意識が共有されていたことがきっかけとなった。

そこで、平成17（2006）年度の最後の鑑賞学習交流会で「鑑賞学習ワーキンググループ」の提案をしたところ、下記のような好意的な意見が多数寄せられた。

平成17年度第４回（2006年３月）鑑賞学習交流会のアンケートから：

○とてもうれしく思います。授業時間数が少なくなった今、鑑賞はとても重要、必要だと考えています。ぜひ参加して意見交流をしたいと思います。それぞれ都合もあるので「参加できる時に…」と少し気楽に考えられると仲間もふえると思います。参加した者が、各現場で実践できるように紹介できればと思います。

○様々な地域や状況、世代の方々と同じ目的をもって交流できることは、とても有意義なことだと思います。勉強させていただける機会がありましたら参加させていただきたいと思います。

○一歩、前に進んだ気がしました。愛知県美術館として愛知のたくさんの方々の発表・交流の場になれば“鑑賞学習”の研究が深まっていくのではないでしょうか。遠くて児童を県美につれてこられない人をも“鑑賞”というテーマで結びつける場になってくれればありがたいです。実践を“県美の展覧会を見て”に限らないでほしい。

○美術館でたくさんの小・中学生を見かけるようになりました。これも鑑賞学習の普及を進めてきた成果だと思います。進める手当てはいろいろあると思います。一方通行でなくいろいろな人と意見を交換できる場があるといいと思います。ぜひ参加したいと思います。

○「美術館のあり方」を真摯に考えていきたいという意欲が感じられました。子どもたちに、もっともっとよい作品を見せてやりたい、という気持ちは大きいのですが、教師がもっといろんな手だてをとることは大切であり、できることからやっていくということが参加者の発表からも分かった。わざわざ来てよかったと思う。ありがとうございました。

○鑑賞活動の指導法について、悩むところが多く、学校内では美術科は1人なので、こういう場があると大変うれしく思います。

○参加者が意見交換・交流できるというのはよいことである。“美術館をとりまく人間”がどんどん増えることが大切なことである。

「鑑賞学習ワーキンググループ」発足後の活動

鑑賞学習ワーキンググループ発足の告知と参加を交流会の場で下記のような概略で呼びかけ、一回の準備会議を開いた後、2006年３月に正式に発足した。

―「鑑賞学習ワーキンググループ」についての提案―

今回、研究会的な性格を持つ「鑑賞学習ワーキンググループ（仮称）」を設定し、美術館とともに研究していく鑑賞学習に関心の高い人を広く募っていくことを提案します。

このワーキンググループでの研究や実践を交流会に還元することで「鑑賞学習交流会」をより充実した内容にできるように努めようとするものであり、成果を交流会で発表して活性化をはかろうとするものです。

メンバー：①鑑賞学習に関心を持ち、美術館と連携して研究や実践を行っていただける小・中・高の教師。美術・図工の専科には限らない。また非常勤講師なども対象。
②現教職員に限らず、鑑賞学習に関心が高く、その研究や実践に参加していただける方。（例：リタイアした教師・美術を学ぶ学生など）

内　　容：①美術館利用・所蔵作品および企画展の作品の教材化・学習指導案・ギャラリートーク・各種ワークシートの研究。
②上記各課題の実践と発表。その他、参加者からの提案についての研究。

成果発表：交流会での発表、愛知県美術館のホームページへの掲載、必要に応じて印刷物の配布など

活 動 日：月１回程度（土曜日午後３時～５時）を予定。参加者の都合により日程を調整し随時（長期休業中も含め）行う。

ワーキンググループへの参加登録は現在35名を数え、小学校19名、中学校12名、高校１名、養護学校１名、元教師１名、学生１名という顔ぶれであるが、全くの自由参加であり、忙しい校務の間を縫って毎月出席するには難しいこともあり、各回10～15名程度の参加で推移している。これまでの「鑑賞学習ワーキンググループ」と「小・中・高の先生方との鑑賞学習交流会」の活動内容の概略は下記のとおりである。

■平成18年度　鑑賞学習ワーキンググループ

1：交流会での発表（2006.4.）

回	開催月日	主 な 活 動 内 容
準備会	２月８日	鑑賞学習ワーキンググループ（仮称）の今後の活動について意見交換
1	３月25日	鑑賞学習、あるいは授業に活用した補助教材について事例研究
2	４月22日	第１回鑑賞学習交流会を振り返って。（総合学習の中に位置付けられた鑑賞教育の事例「美術館を作ろう」）
3	５月13日	鑑賞学習、あるいは授業に活用した補助教材について。（「パズルでアート」「アートカードを使った事前学習と美術館見学を組み合わせた実践」） 所蔵作品へのアプローチ　海老原喜之助《雪山と樵》
4	６月17日	鑑賞学習、あるいは授業に活用した補助教材について（「なにに見える　エルンスト《ポーランドの騎士》」 所蔵作品へのアプローチ　クプカ《灰色と金色の展開》
5	７月22日	鑑賞学習、あるいは授業に活用した補助教材について（「アートゲームで８つの像の表情の表現を感じ取ろう」）
	８月25日	夏休み子ども鑑賞会　見学・反省会、一部の先生はガイド役を務める。
6	９月９日	鑑賞学習ＷＧの今後の在り方について
7	10月21日	愛知県美術館所蔵作品を使ってのギャラリートーク実践のための事前協議
8	11月18日	愛知県美術館所蔵作品を使ってのギャラリートーク（舟越桂《肩で眠る月》、猪熊弦一郎《地図の中の日曜日》、ジム・ダイン《芝刈機》）の実践）
9	１月20日	愛知県美術館所蔵作品を使っての前回のギャラリートークを振り返って検討会
10	２月24日	愛知県美術館所蔵作品を使ってのギャラリートーク（クレー《女の館》、瑛九《黄色い花》、白髪一雄《作品》）の実践）

2：交流会での発表（2006.4.）

■平成18年度　小・中・高の先生方との鑑賞学習交流会

回	開催月日	主 な 内 容	発 表 者
1	４月22日	『総合的な学習　美術館をつくろう　～鑑賞学習を柱にした図画工作科と総合的な学習の合科の試みを通して～』	中山知恵子 （美浜町立河和小学校）
2	６月17日	パズルでアート－「ひまわりをかこう」－	小澤江里 （一宮市立向山小学校）
		「視点を絞る」　ルネサンスの魅力	小林克敏 （半田市立成岩中学校）
3	８月25日	「夏休み子ども鑑賞会」見学、反省会	

3：交流会での報告（2006.9）

3	9月9日	「愉しき家」展ワークショップ報告	森美樹 （愛知県美術館学芸員）
		「平成18年度美術館を活用した鑑賞教育の充実のための指導者研修」（於：東京国立近代美術館）を受講しての報告	小崎真 （豊明市立豊明小学校） 岡島叔子 （尾張旭市立東栄小学校） 浅尾知子 （愛西市立草平小学校） 小栗恵子 （愛知県美術館学芸員）
4	10月21日	「夏休み子ども鑑賞会」　報告	小栗恵子 （愛知県美術館学芸員）
		教育研修としての「夏休み子ども鑑賞会」参加報告	岡島叔子 （尾張旭市立東栄小学校）
		「平成18年度　校内現職教育研修（美術鑑賞）」（於：愛知県美術館）の報告	中山知恵子 （美浜町立河和小学校）
5	1月20日	「第45回東京都図画工作研究大会（北多摩）」報告 「鑑賞学習ワーキンググループの活動」報告	高橋秀治 （愛知県美術館学芸員）

4：夏休み子ども鑑賞会（2006.8）

5：交流会での報告　（2007.1）

上記の簡易な表では、読み取りにくいが、ワーキンググループでの活動内容と交流会での報告内容は深く関連しており、ワーキンググループの活動がなければできなかったものばかりである。その中からいくつか、もう少し詳しく紹介したい。

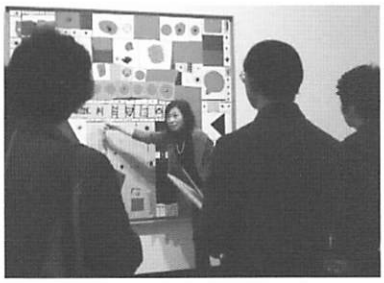
第１回交流会で発表された『総合的な学習　美術館をつくろう～鑑賞学習を柱にした図画工作科と総合的な学習の合科の試みを通して～』は、総合学習と図画工作科をうまく使って、前年の７ヶ月にわたって「美術館を作ろう」というテーマの中に、問題解決力、情報活用力、チームワーク力、コミュニケーション力、想像力・創造力などを養うべく、さまざまな活動が展開された事例であった。これを発表したのは前年までは交流会には参加されていたが特別に美術館側や他の参加者と深く接触のなかった先生であった。しかし、ワーキンググループの活動を知って参加し、事前にワーキンググループでの事例研究で、参加していた他の先生方が是非交流会でも広く知ってもらうことがよいと賛同を得て、交流会での発表に結びついたものであった。交流会で聞いた先生たちもすぐに自分が取り組めないまでもかなり衝撃があったようである。これはまさにワーキンググループで気軽に各自の実践事例を紹介しあったりすることができていたからこそ、交流会へ結びついたものである。この事例では美術館を知るために愛知県美術館や市内の別の美術館を子供たちは訪問している。（参考１、写真１、２）

一方こういった大掛かりな事例とは反対に、気軽にしかも専科の先生でなくてもやれそうな事例として紹介してもらったのが、第２回の「パズルでアート」である。これはゴッホ展で入手したひまわりの画像を使って、モノクロのコピーを９等分した絵合わせのパズルで作品に親しませるところから、作品自体の構成や描き方の特徴などに着目させるもので、さらに着色させることで、色に対しても意識させるというものである。この発表は前年の交流会の別の先生の発表にヒントを得て、自分なりにアレンジして、校内の他の図工を専科としていない教師も取り組めるように工夫したもので、まさに教師同士の情報交換の場である交流会の意味のあるものであった。（参考２）

この他にワーキンググループでの活動で美術館との関係のできた教師が所属する学校の研修会として学校長等に働きかけ、研修会場を美術館にして美術鑑賞を他教科の教師に経験させるということに結びついた例もある。この事例では教師向けのワークシートが用意され、この研修に参加した他教科の教師の感想には楽しかった様子が綴られており、美術専科だけでない拡がりとなる活動であった。

そして、ワーキンググループに積極的に参加された教師のうち数人がボランティアとして、

6：尾張旭市造形部会研修会（2006.12）



7：ワーキンググループでのギャラリートークの実践（2006.11）

8：ワーキンググループでのギャラリートークの実践（2007.2）

愛知県美術館夏休み子ども鑑賞会の講師として参加していただいたことも、鑑賞学習のリーダーと美術館の連携の確かな足取りのひとつとして記録しておきたいことである。（写真４）

また、対象者を教育関係者の誰でもよいとする本来の「小・中・高の先生方と鑑賞学習交流会」とは違い、対象者が造形部会の教師に限られるため上記の表には表されていないが、尾張旭市の造形部会の研修を愛知県美術館で鑑賞学習をテーマに開き、その講師として交流会、ワーキンググループの活動を通して知り合った教師同士の連携で、他の市の教師がボランティアでその講師を務めるという横のつながりのできた研修会も実現した。（写真６）

さらに、全国的にも近年美術館での鑑賞教育への活動の高まりを受けて、様々な活動がなされており他県での実践や研究会、研修会などの事例報告を随時するようにして、多くの教師が広い視野で鑑賞教育に取り組んでもらえるようにと、「平成18年度美術館を活用した鑑賞教育の充実のための指導者研修」（於：東京国立近代美術館）を受講した先生や学芸員からの報告、美術館と学校の連携を研究した事例発表が行なわれた「第45回東京都図画工作研究大会（北多摩大会）」（於：府中市美術館）に参加した学芸員の報告も行った。（写真３、５）

なお、この活動報告とその考え方の末尾にワーキンググループで行なったギャラリートークの実践例のうち２例を付記する。（参考３、写真７，８）

今後に向けて

ここで紹介してきた「小・中・高の先生方との鑑賞学習交流会」と「鑑賞学習ワーキンググループ」の相乗効果を狙った活動はまだ一年を経たところである。そこには参加している先生同士の情報交換や資料の提供のし合い、研究への協力などいろいろとこれからも楽しみな動きの端緒が見え始めている。交流会に参加している教師側では必ずしも美術館へ来なくてもできる鑑賞教育について勉強したいという気持ちを持った人たちも多い。それは、さまざまな制約のある日々の学校での活動に美術館へ出かけられるだけの余裕がないということも理由のひとつであろう。あるいは物理的に遠距離で子どもたちを連れて来られないということもある。また、これまで実際に児童・生徒を引率して来館した教師の中には、ただ連れてきてあとは「勝手に見ろ」あるいは「美術館におまかせ」というタイプの人物がなくならないのも事実である。それらさまざまな状況に対して美術館側としてできることは何かと考えたとき、学校との接触のどんな機会もできるだけ逃さず、美術を見る愉しみを分かち合うという教育普及活動を通して、美術館の理解者を増やすことが一番の基本ではないかと考えている。これからの交流会やワーキンググループの活動も、参加者各個人が自ら学びたい、他の教師たちと交流を図りたいという自主的な活動の継続であるということである。美術館は、単に近視眼的に多くの観客を集めるためにこういった活動を模索しているのではなく、かなり先を見据えて、鑑賞学習をリードするリーダーの育成をし、美術館の理解者を一人でも増やすことが、豊かな精神生活をおくることのできる子どもたちを育てることにつながると考えている。先生方によく言うことに「みなさんの教えている子どもたちのうち、いわゆる美術の専門家となる子はほんのわずかでしょう。でも、美術を見て愉しみを味わえることを覚えた子どもたちはきっと、生涯「見る愉しみ」という財産を持つことができるのではないでしょうか。ですから、描くことは不得意でも見ることは好きと言う子を育ててください」ということがある。それをすこしでも美術館がサポートできれば、美術館が市民生活にとって、なくなっても構わないものなどと言う人が少なくなるのではないかと思う。

誰もが美術作品を見たときに、自信を持って自分なりの見方ができるようになっていくためには、子供のころの体験はきわめて重要なことは論を待たないが、その経験を積ませるのは、美術館へ子供たちをつれてきて、ただ漫然と見せるだけの教師ではなく、見る愉しみを伝える工夫と技術を持った鑑賞のリーダーが必要である。そうした教師を少しでも増やしていくために、よい作品を収集・展示し、よい企画の展覧会を開き、そのよさを伝える熱意と工夫が美術館には求められていると言えるだろう。

（参考１）

総合的な学習　**美術館を作ろう**

～鑑賞学習を柱にした　図画工作科と総合的な学習の合科の試みを通して～

知多郡美浜町立河和小学校　中山知恵子

１　概要

17年度の６年生の総合的な学習の年間計画立案において、学年テーマの国際理解にちなんで「美術館を作ろう」と提案をした。図画工作の時間に制作する「名画レリーフ」は、有名な作家の作品を選ぶので、作家の生い立ちや作品を所蔵している美術館を調べることが、いろいろな国を知る手がかりになると考えたからである。

それまでは、図画工作の授業時間内で、教師が展示した自分たちの作品を鑑賞し、その中から好きな作品を選んで、ベスト１を決めて、ランキングを発表したりするなど、友だちの作品や他の学年の作品を鑑賞するという経験はたくさんしてきた。

しかし、自分たちで展覧会の会場を作り、作品を飾り付けて他の人に見てもらう展覧会を開くという経験はしたことがなかった。子ども達が学年以外の参観者に見てもらうという気持ちを持ち、表現を工夫する、あるいは自分の作品を美術館に飾るということを想像しながら制作すれば、制作への意欲的な取り組みが期待できるし、自分たちの作品でテーマ分けをする学芸員さん体験の鑑賞の授業がもてるだろうと構想を立てた。

子ども達には最終学年（６年生）ということで、思いを込めて心に残る作品作りに取り組み、その作品をたくさんの人達に鑑賞してもらおうと呼びかけ、「美術館を作ろう」の計画が始まった。またクラス毎に子ども達が協力して作り上げる意識をもつために「展覧会を開こう」ではなく、「美術館を作ろう」という大きな目標を掲げたのである。

そのための手だてとして、美術館見学で学芸員さんに話を聞くことや、実際に見学して美術館の工夫を探る活動を大きな手だてとした。

幸運なことに昨年度は愛地球博があり大きな企画展のゴッホ展を愛知県美術館で見ることができたし、ボストン美術館でもルノアールやゴッホ、ドガなどの作品にも出会うことができた。そのことが大きな動機付けとなり、関心を持って取り組むことができた。この学習を通して、美術館は作品をただ飾って見るところだけではないことを知り、作家と学芸員さんの気持ちも考えて、鑑賞の楽しみを体験することができた。それは生涯学習の一つとしての美術館鑑賞学習のスタートであると思う。またこの実践は、図画工作科と総合的な学習を合科にしたことで幅の広い活動が展開できたと思う。

ぐんぐん学習活動計画表　　**○○美術館を作ろう**　　６年

月／日	学習目標	活動の流れ
6／	名画を知る（朝学習、図工１） 「あーとビンゴ」	・美術絵本を読む ・作家、心に残った絵、その絵のある美術館名、コメントなどをあーとビンゴ表にかく。 ○作家ビンゴをしながらいろいろな絵や作家を知る。
7／	一枚の絵を決める	・自分の創りたい作品を決める（２学期図画工作で名画レリーフ作成予定） ○ぐんぐん学習の見通しをもつ。 どんな美術館にしたいが計画を立てる。 活動計画表を見て、テーマとゴールを思い描く。
7～8	作家を知ろう（夏休み課題） 一枚の絵から調べ学習をする。 「あーとマップ」	○決めた一枚の絵から「あーとマップ」作成。 調べたいことを決める。 ・作家調べ（生い立ち）　・国調べ　・美術館調べなど 調べる方法を知る。 ・本　・インターネット　・美術館に行くなど
9／ 9／13 9／	美術館を知ろう（総合５） 美術館見学 美術館新聞作り（総合３） 新聞鑑賞	○美術館について調べる計画を立てる。 校外学習実行委員しおり作成 ○愛知県美術館（ゴッホ展、常設展）、ボストン美術館（ボストン美術館の巨匠たち）を見学する。 ○見学をもとに調べたことをまとめる。 ○学年投票で優秀賞を決める
10	○○美術館を作ろう （図画３、総合４）	○どんな美術館にするか計画を立てる。 ・名称、企画、展示の仕方や展示期間、宣伝方法など（美術館実行委員を中心にして考えよう）
9～11	作品を作ろう（図工15） 名画レリーフ作品	○作品作り ○鑑賞（図工１）
11	パンフレットを作ろう（総合６）	○自分の作品を紹介しよう（ポスター） ・コンピュータで作成
12	○○美術館の展覧会を開催しよう （総合３）	○学級で展示の仕方を考え準備する。 ○展覧会開催
12	活動を振り返ろう（総合３）	○感想と反省を書こう。

先生方との鑑賞学習交流会後の参加者のコメント

○年間にわたる壮大なプロジェクトで驚きでした。とてもよい刺激になりました。美術館の協力、教師の熱意を感じました。

○学校の授業のことが発表できる機会を設けることができたことがすごい。

○わかりやすく愉しい発表でした。指導次第では、子どもたちがここ

まで力をつけることができる。意欲的に（楽しく）取り組むことが出来ることを学べる発表でした。

○鑑賞の方法、美術館・作品とのかかわりについて、どうやれば良いのかいつも悩んでいました。中山先生の「これをやりたい！」という思いが子どもたちに伝わり、目標に向かっていけた原動力かと思います。同じようにやるのにはなかなか難しいですが、たくさんのヒントをいただけました。

○「美術館」に至るまでの切り口や展開の仕方がけっこうユニークでとても楽しかった。総合的な学習に本当になっていると思いました。調べる、つくる、まとめる、表す、…それぞれの活動も１本でないのは、それは、先生の豊かさなんだろうと思います。子どもたちに本物の活動や感動を経験させようとしたら、やっぱり時間内で手っ取り早く、楽にはいかない…ということですね。職員を巻きこむパワーもいい!!

○総合の時間を活かしているところが素晴らしい。学年での対応ができたこともよかったことだと思います。中学校の総合ではなかなか難しいのですが、どこかで活かしたいと思います。

○直接とまではいかないまでも参考にしたい。子どもの素直な鑑賞力を活かした表現（作品）が見られて嬉しく思います。今後もこのような発表を続けていただきたい。

○今年中学校の教員となりました。とても興味をもちました。いつか自分もやってみたい。もっともっと詳しく知りたいです。

○実のある学習ができた。このように実践発表が望ましいと思う。参考になるのではないか。ただし、あいかわらず"県美につれてきて"での実践なのが残念。中山先生は人柄もあるにしても、図工科として活動できる大変恵まれた立場にあると思う。（このような立場で活動できる人はどれくらいいる？）うらやましい限りです。

○熱心な先生の姿に自分もこれまでの一方通行の授業から脱却しないといけないと思いました。はげみになります。

（参考２）

パズルでアート ―《ひまわり》をかこう―

一宮市立向山小学校　小澤江里

１．育みたい資質や能力

・作品と触れ合い、作品の形や色、表し方の面白さなどに気づき、見ることを楽しもうとする。

・主体的な鑑賞活動を通して、児童自身が自らの感性を刺激し、さらに感性を磨くことによって、表現力の糧とする。

２．題材について

低学年から楽しく興味をもって取り組むことができる鑑賞活動として、アートゲームを取り入れた。アートゲームは、ゲーム的な活動を通して、美術作品に親しみながら、鑑賞する力をつけていくことを目的とした手法である。作品を黙って見るだけでなく、作品について感想を述べたり語り合ったりする言葉の使用や、触ってみたり身体を使っての操作活動など、視覚や触覚、言語や身体を総合的に用いて、作品に親しむ活動である。本題材では、形や線に目を向けさせたいと考え、無彩色のパズルを、一人一人が組み合わせる活動を取り入れた。

ゴッホのひまわりは、多くの人に親しまれている作品である。花瓶に飾られたひまわりは、形も向きも様々である。まず、無彩色の作品を９枚の正方形に分割したパズルを復元させる活動をする。無彩色のパズルであるため、対象の形や線に目を向けることができる。作品全体がわかった後、自分で考えたイメージで、彩色する。最後にゴッホの彩色された作品を、自分の作品と比べながら見ることにより、色づかいおける表現力に結びつく「鑑賞」にしたいと考えた。

３．学習の目標

＜関心・意欲・態度＞

・パズルゲームや彩色活動を通し、作品に興味をもち、見ることを楽しもうとしている。

＜鑑賞の能力＞

・線、形、色などについて、感じたり、味わったりしたことを、自分の表現で伝えることができる。

・友だちと比べたり、話し合ったりしながら、自分なりに感じ取ることができる。

４．指導計画

・無彩色のパズルをつくり、つくった視点について、話し合う。

・自分で考えた色で表現する。

・作品の全体を知り、線、形、色などについて、話し合う。

５．学習のながれ

段階	学習活動と教師の働きかけ	指導上の留意点
導入	１　アートとジャンケンをする 「ジャンケンの手は、どこにあるでしょう」 ・手の形を見つける ２　めあてをつかむ　「名画の秘密をさぐろう」	・作品の細部（手の形）に注目させる ・名画に合わせて、身体表現させる ・１枚の絵を分けたパズルであることを知らせる
展開	３　パズルゲームをする 「１枚の絵を９つに分けたパズルです。どんな絵ができるでしょう」 ４　パズルをつくった視点を発表したり、聞いたりする 「どんなことに気をつけてつくりましたか」 ・パズル絵づくりのこつ（早くできた理由）を話す ５　作品全体（無彩色）を知り、色で表現する。 「この絵はどんな色が合うでしょう」	・自分ではやくできる方法を考えさせる ・なぜ早くできたのかを発表させたり、聞いたりさせることにより、線や形に目を向けさせる ・自分で合う色を考えさせる ・かけるところから表現させる ・なぜその色をつかったのかを発表させたり、聞いたりさせることにより、色に目をむけさせる

	6　絵を見合う 「友だちは、色で、どんな気持ちや様子を表したかったのでしょう」	・友だちの考えを聞きながら、絵を見合わせる ・いろいろな感じ方や表現を知り、よさを認め、味わわせる
まとめ	7　作品の全体を知る 「作品の色は、こうなっています。どんなことに気づきましたか。どんなことを思いましたか」 8　本時の学習を振り返る ・気づいたことや感じたことを話したり、書いたりする	・自分の表現と比べる ・作品や作者について知らせる。 ・いろいろな表現や感じ方を知り、自分なりに話したり、書いたりする

6．評価

・作品に興味を持ち、楽しく活動できたか
・作品について、感じたり味わったりしたことを、自分の方法で表現することができたか
・いろいろな感じ方や表現について、自分と比べたり話し合ったりしながら、自分なりにかんじとることができたか

先生方との鑑賞学習交流会後の参加者のコメント

○小学校・小澤先生：発表を聞いて、誰にでもできる短時間の鑑賞教材として今後、やってみようと、これなら出来ると思える内容で、大変参考になりました。

○とてもわかりやすい。応用が利く。学校公開日など保護者と一緒のプランもできそうでよかったと思います。

○他の事例からインスピレーションをうけて発展していくような事例を聞けたことでこの会の目的を目の当たりにしたように思いました。

○小澤先生の発表は楽しく早い生徒にも、遅い生徒にも工夫が凝らされていて感動しました。自分たちで生徒にやらせてからゴッホと比べ独特の性格に気づかせるのは、すばらしい。

（参考３）

ギャラリートーク実践例１

―《地図の中の日曜日》猪熊弦一郎（愛知県美術館所蔵）2006.11.18実施―

尾張旭市立東栄小学校　岡島叔子

１　はじめに

今回、ギャラリートークにこの作品を選んだのは、本校の２年生を愛知県美術館に鑑賞に連れて来た際、多くの児童が最も好きな作品に挙げていたことからである。明るくて楽しいイメージのこの作品には何が描かれているのか、小学校低学年の児童でも興味をもったようである。

子どもたちの心を動かすこの作品の魅力に、ギャラリートークで迫ってみようと思った。

まず、作品をよく見せてから「何が見える？」「何が描いてある？」「この絵の中で何がおこっている？」といったビジュアル・シンキング（※）の基本的な発問を用いて、一緒に探偵気分で描かれたものを発見し、それが意味するものを自分なりに考えることができるとよいと考えた。そのための一つの方法として、色や形から想像する音や様子を表すことばを導きだし、作品に興味を持たせ、鑑賞することの楽しさを味わわせたいと思う。

段階	リーダーの働きかけ	意図・留意点など
事前に	○キャプションを隠しておく （今回は小学校３年生対象で試みる）	・題名や作者から、先入観を持たずに作品に向かわせ、自由に想像させたい。
展　開 約30分	1　作品を見て自由に想像を膨らませる 「今日はこの作品を見て、この絵に何が描かれているか、絵の中で何が起こっているか、探偵気分で推理してみましょう。」 2　作品から感じたことを自由に話す 「たくさんの色や形の中に、音（ドンドン、ポタポタなど）や様子（ふわ～、そわそわなど）を表す言葉を感じたら、教えてください。また、そう感じたのはどの部分かも教えてください。」 ・ウキウキ　・ガタッ　・上からポタポタ ・スタートボタンがピッ　・ペタペタ ・電車がゴトゴト　・ブーン 3　作品全体で感じたことを話し合う 「今度は少し離れた所から作品を見て、作品全体で感じたことを自分の言葉で話してください。」 ・友達とジャンケンをして場所取りをしている。 ・ここがスタートのすごろくのよう。 ・スタートから順にスケジュールをかいた。 ・いろんな気持ちをかく自分の日記帳。 ・運動場で頭上に色板を持って並び、上から見た。	・全体→部分→全体という順で作品を見せ、新しい発見をさせたいため、遠く→近く→遠く（自由に）と見る位置を指示する。 ・どんな音が聞こえるか（擬音）と様子を表す言葉（擬態）を探させることで、よく見させるとともに自由な発想を導き出したい。 ・「何を見てそう感じたの」「どうしてそう思ったの」と聞くことで、なんとなくとか雰囲気でといったあいまいにしていたことに答えを見つけさせることができると考える。 ・まずはよく聞き、あいづちや笑顔でしっかり受けとめ、自由に話せる雰囲気づくりをする。 ・何も思い浮かばない場合は、中央の一週間を想起させる部分に注目させ、作品を見るヒントとしたい。 ・他の人の考えを聞きながら、いろいろな感じ方を知る。

	4　題名を考える 「最後に遠くや近くから自由に見て、この作品に題名をつけてみましょう。」 ・にぎやかな一日　・楽しかった一週間 ・思い出　・日記　・みんないっしょ ・立体すごろくパソコンゲーム	・自分なりの題名をつけることで鑑賞の楽しさを味わわせる。 ・最後に実際の題名を知らせるが、題名当てではないので、それぞれのつけた題名のおもしろさを認め合う。
事後に （低学年には必要ない）	○作者の他の作品について知る この作品の要素となっている、同じ作者の抽象表現の作品を数点見る。	・作品や作者について知らせることで、作者の歴史や思いに少しでも触れることができるとよい。 （小学校高学年以上の場合）

2　トーク後の先生方のコメント

○キャプションを隠してあって「何の音？」と入っていくのがおもしろかった。中学生では「ん～？」と思うかもしれないが、小学校の低学年だったらもっとわれ先に「ハイハイ！！」と言い出すような気がします。

○「どんな音」からのスタートは、子どもには入りやすい。よく見るきっかけになる。
「近く」「遠く」で見るように言われて、また見方がちがった。新しい発見ができ、とても楽しかった。

○タイトルを隠しているのは、自由に作品から想像できるからいいと思った。
発言をしていく中で、実際に作品を理解するキーワード（今回なら、スケジュール、日曜日、上から見てるなど）に、先生が他の発言よりも反応すると、その傾向に偏った発言が出てくるようになるのかなと、今日の様子を見て感じた。

○音とかを考えていくのはとても楽しかった。もっといろんな音をみつけたいと思ったので、音をテーマにもっといろんな作品も一緒にも見たいと思った。

○「音、様子を表すことばさがし」楽しく見るきっかけとなった。特にこの絵からは、いろいろなことばが見つかりやすいと思う。とてもよい発問だと思った。

○「この絵を見てどう思うか？」と聞かれ、頭のかたい私は最初とまどったが、他の人の意見を聞いているうちに、自分のイメージもわいてきた。みんなで話し合うことの大切さを感じた。「題名を自分でつける」…すごくおもしろかった。

○音→様子→何を感じた→題名当て→説明。すごくいいアプローチでみんながたくさん意見が言えて良かった。うまい！子どもの心がよくわかっていて、進め方がいい！すばらしい！

○子どもの発見に対する教師の反応や返答に差があると、感じ方に正解、不正解はないと言われても、正解を競うクイズのように思えるかも。すべての発言に対して、「いいところに気がついたね」と言わなければならないと思うし、それが不自然なら、統一した反応を示した方がよいのではと思えた。気の利いた発見のできない子どもに、どのように興味をもたせるのかが難しいと思いました。

○猪熊さんの作品は、初めてじっくり見ました。トーク鑑賞の素晴らしさを実体験しました。小３であれ大人であれ、同じかな？

3　ギャラリートークを終えて

初めての体験でどうなるかと思ったが、参加された皆さんのたくさんの発言で、ギャラリートークを盛り上げていただき、大変うれしかった。

小学校３年生という設定で皆さんにトークしてもらったが、学年を設定するのも難しかった。
高学年でもこのままでいけそうな気もしたが、「どんな音がする？」という質問で、恥ずかしがらずにどんどん思ったことを言えるのは、やはり低学年だろうか。

事前に自分のクラス（小学校６年生）でも鑑賞授業として実践してみた。作品の図版が小さく、自由な発想で話し合いができるかと心配したが、作品の力が大きく、自由で新鮮なイメージが展開できた。その際、ガイドとして別紙のワークシートを使用した。

今回のギャラリートークでは、初めから一つの結論に導くことは必要ないと思っていたが、作品の中の一週間という単位を想起させる要素や、地図という暗示に気づかせようと、こちらの意図を示す言動が多かったと反省した。しかし、皆さんの思いもよらない素敵な発想の数々に、自分自身もこの作品に対しての新しい発見をしたり、作品の見方の違いを感じたりして、トークの楽しさを味わうことができたことは大変良かった。また、ちょうど通りがかった一般の来館者の方が、自然にトークに参加していただけたこともうれしかった。

今回、このような貴重な体験をさせていただき、感謝している。トーク後の先生方からいただいたコメントも大変参考になり、今後に生かしていきたい。また機会があれば、別の作品でギャラリートークしてみたいと思う。ありがとうございました。

※　ビジュアル・シンキング　元ニューヨーク近代美術館館長フィリップ・ヤノワインの提唱する、美術鑑賞学習のためのグループ・コミュニケーションの方法（Visual Thinking Strategies）。作品を注意深く見て話し合うことを通して、思考能力、コミュニケーション能力、視覚的表現の基礎的能力が身につくとしている。　「日本美術の授業」日本文教出版参照

ギャラリートーク実践例２

—≪女の館≫パウル＝クレー　（愛知県美術館所蔵）2007.2.24実施—

半田市立成岩中学校　小林　克敏

1　はじめに

愛知県美術館では中学生を対象としたギャラリートークは夏休みなどでも行われてきているが，生徒がなかなか発言をしない，反応が乏しいなど難しい面も見られる。今回の実践では，中学２年生を対象にして，作品のいろいろな見方を示し，生徒が主体的に作品を鑑賞し，問いかけに対する反応を少しでも引き出すことをねらいとして設定してみた。

クレーの作品を選んだ理由として

①美しい階調をもち，単純な形や色彩による画面構成が見受けられる。画面構成を「色や形の響き合い」としてとらえるには適した作品といえる。
②「物」を抽象化した形で構成されているので，抽象表現の入り口としてもふさわしい。
③画面が暗いので「アヤシイ雰囲気」として興味をもたせやすい。

またクレーの作品鑑賞の発展として，キルヒナーの作品「日の当たる庭」とサム＝フランシスの「消失に向かう地点の青」を鑑賞することにした。キルヒナーの作品では何が描かれているかを探るよりも，色や形による構成を見ることの面白さを感じ取ることにより作品の価値をつかめると考えた。サム＝フランシスの作品では自由に鑑賞し，お互いに意見を述べることにした。

2　指導の流れ（ギャラリートークの流れ）

段階	学　習　活　動	指導上の留意事項
興味づけ	1　遠くからクレーの作品を見る。 T「どんな感じがしますか？」 S『暗い…』『不気味な感じ』	・入室すると緊張感をもつ。声を小さくして作品へのアプローチにも緊張感を生かす。
	2　アート探検隊を編成する。 (1)　「探検隊」を決め，近くで観察する。 T「どうもアヤシイので，調査しよう。」 探検隊３名は絵の近くに行って調べてくる。 課題：隊員は２つ以上調べ上げてメモする。	・リーダー的な生徒を指名するか，意見を出させてもよい。 ・他の人の為に真正面の場所は空ける。
	(2)　遠くからも何が描いてあるのか見てみよう。 T「何が描いてあるように見える？」 S『木』『家』『暗い海』…	・用紙は一枚に書かせる。 ・遠くからは雰囲気を感じ取らせ，共感的に話を聞く。 ・「どんなことを発表するのだろう」と興味をもたせる。
	(3)　探検隊はメモをもとに報告する。 ・油絵の具で描いている。 ・街が描いてある。…『なるほど』『ほ～』	・共感的に発表を取り上げる。絵を構築している「物」を確かめるようにする。
	(4)　実際に近寄って見てみる。 T「何が描かれている？」 S『木』『家』『レースのカーテン』「入口」 T「クレーの≪女の館≫という絵です」 S『家がそうかな』『女の人がいるみたい』 「入口を広げている」 T「近くで見るとどんな感じ？」 S『よく分かる』『細かいところがわかる』	・題名から絵の概略を把握させる。 （入り口や二人の女性の姿など） ・遠くから見て雰囲気をつかむことも大切であることを押させたい。
	3　色や形の響き合いをとらえる。 T「そこで，今日は別な見方をしてみよう。」 「質問をします。」 「この赤い三日月はどこにある？」『こっち』 「赤い丸の形は？」『あっちとこっち』 「きみどりは？」『〃』「こいみどりは？『〃』 「三角形は？」『〃』「ながしかくは？」『〃』 T「色や形があっちこっちで関わっています。 これは「響き合っている」とも言えます。 これを見ていくのも楽しいものです。」 ※ここがきちんとおさえられるとよいのだが	・写実的な絵ではないことをおさえ，見方を転換させる。 ・生徒の答えを作品の中で確かめながら色やかたちが，あちこちでお互いに対応している（響き合っている）ことをつかむ ・画面が息づいている感じや点線の効果も感じとらせたい。また，クレーがどのような意図をもってこのように描いたか，各自で考えさせたい。
	クレーが何かから感じた色や形，自分で創り出した色や形を，画面の中で自由に響き合わせていることを感じ取る。	
	4　他の作品で色や形の響き合いを楽しむ。 T「他の作品を見てみよう。」 「これはキルヒナーの≪日の当たる庭≫という作品です。何が描かれていますか。」 S『窓』『灰皿』『煙』『家』『女の人』… T「どんな感じがするかな？後で考えてみて」 T「この作品ではどことどこが響き合っているでしょうか？」 S『左右の窓のわく』『木と地面』『ビルの形』 T「木の明るいところと煙なども関係している」 S『灰皿と明るい地面』 T「よく見るとたくさん響き合っていることがわかります。そういう見方もあるのです。」	・作品の見方を確かめるために，他の絵に応用してみる。 ・何が描かれているか，どんな感じかは少し触れるにとどめる。 ・画面の中で似ている色や形を見つけ出させる。 ・反対の色や形はどうかを見させる。 ・いろいろな相似を見つけ出す楽しみを味わうようにヒントを出す。

	5　抽象作品で色や形の響き合いを楽しむ。 T「次の作品を見てみよう。」 T「どうやって描いたんだろうね？」 S『筆でぐしゃぐしゃした』 T「どんな響き合いが見られますか？」 S『あおとみどり』『小さいあおと大きいあお』 『細かいところと描いてないところ』	・サム＝フランシスの≪消失の地点に向かう青≫を近くで見て作者の手の動きを感じ取らせる。 ・画面のあちこちが響き合っている楽しさを感じ取らせたい。
	6　作品の見方の一つとして，色や形の響き合いをとらえて楽しむ方法があることを確かめる。 T「作品の見方にはいろいろな方法があります。 作者がどのように色や形の響き合いをさせているか。また，何を考えてそのように塗ったかなど，疑問をもって見ることや，自分なりに答えを考えることも楽しさのひとつです。」	・何が描いてあるか，なぜ作者がそのように描いたのか，どうやって描いたのかなどを疑問として考えるのも絵を見る楽しみであることをおさえる。

ギャラリートーク後の先生方のコメント

○ものの見方を即物的なものから，感覚的なものに導いていく方法として，中学生，高学年にぜひ見せたいと思います。それが発展して作家の世界観，人生観につながったらよりよいと思います。

○どの絵もとても魅力のある色が使ってあった。とくに緑色。その反対に，構成などはとても不思議な感じ。時には嫌な感じがしたりして。「女の館」は女性の感じだなと思った。

○違った見方をすることができた。曲線的なもの，けむりの形，灰皿などの形が響き合う。
クレーの絵をはじめに取り上げられたことがよかったです。響き合いという新しい見方が勉強になりました。興味深く取り組めました。

○質問がわかりやすくてとてもよかった。ひびきあいということばがとてもここちよかった。

○「女の館」色や形がひびき合っている。
キルヒナー「日の当たる庭」この作品で「ひびき合うものを見つけよう」と言われて，はじめてこの作品をそういう見方で見ることができた。すると今まで気づかなかったことがたくさん見つけることができた。

○見つけたもの→同じもの見つけ→ひびき合いどこを見ればよいかよくわかった。

○テンポが良くて楽しめました。クレー→キルヒナー→サム＝フランシスの順はすごい。
１回の見学であまり長い時間とれない中学生への鑑賞としてはとてもよいと思います。
このテンポなら集中力のない中学２年男子もついてくると思います。
３人の探検隊調査は小学生でも使えます。一気に３チーム出して，３点に行かせたら待っているのも退屈しないかな～と思いました。

○クレーの作品はじめ見たときは後の家の形に目がいって前の暗い部分が感じられなかったのですが，話をするうち，ゆっくり見ているうちに奥行きを感じるようになりました。